

税に助けられた命

札幌市立向陵中学校3年 福井 清夏

「お父さんが大変！」

母の悲鳴に驚いて父の部屋に駆け込むと、意識を失って倒れている父の姿がありました。何度も名前を呼びましたが反応がなく、私は頭が真っ白になりました。

父には持病がありますが、定期的に通院して薬をのんでいれば普通に暮らすことができます。しかしその日は風邪をひいて体調が悪かったことが引き金になって倒れてしまったのです。

母は震える手で救急車を呼ぼうとしましたが、何度も番号を押し間違えるほど動搖していました。それでも電話口の消防署の方は落ち着いて状況を聞き、すぐに出動の手配をしてくれました。その冷静で優しい声に、少し気持ちが落ち着いたことを覚えています。

五分も経たないうちに救急車が到着し、四人の救急隊員の方が父の元に駆けつけてくれました。母から状況を聞きながらてきぱきと処置をしてくださる姿はとても頼もしく、心細さでいっぱいの私には後光がさして見えました。

やがて父はうっすらと目を開け、呼びかけにかすかに応えました。その瞬間、安心して全身の力が抜け、私はその場に座り込んでしまいました。父はその後病院に運ばれ、数日間入院して無事に退院できました。

助けていただいたことへの感謝と同時に、私は驚きも感じました。それは、あれだけの人や設備が関わったのに、救急車の費用がかからなかつたからです。調べてみると、救急車一回の出動には約四万五千円かかり、そのお金は消費税や所得税など、私たちが納めている税金でまかなわれていることがわかりました。

私はこれまで買い物や外食の時にかかる消費税に「余計なお金を取りられる」とマイナスイメージを持っていました。しかしあの日、父の命を救ってくれた救急車の出動費用も医療費の一部も、まさにその税金で支えられていたことを知って、考えは大きく変わりました。

もし医療費を全額支払わなければならなかつたとしたら、安心して十分な治療を受けられなかつたかもしれません。税は「余計に取られるお金」などではなく、社会全体で幸せな暮らしや命を支え合う「大切なお守り」だと強く感じました。

よく考えると、私の身の回りには税に支えられているものが山ほどありました。毎日通っている学校や教科書、大雪の翌朝、雪に埋まらずに通学できるのも除雪車の出動のおかげです。

あの日、誰かが納めた税金が私の大切な父を守ってくれた事実を私は一生忘れません。あと三年で私は納税者になります。恩返しの気持ちを込めて、見えない誰かや自分の大切な人の幸せを守る一員になれるこことを誇りに思いながら納税していこうと思います。